



## ビットコイン その1

「ビットコイン」という言葉を聞いたことがあるだろう。聞いたことはあるが、実態については???な部分も多いに違いない。テレビCFの出川兄弟状態? (笑)である。

1年生の時に「マルジャーナの知恵」を学習したが、その著者であり、平成22年度のセンター試験などをはじめ、多くの大学で入試に出題される必読著者の一人である岩井克人さん(1947年生まれ、専門は経済理論。国際基督教大学特別招聘教授、東京大学名誉教授。「貨幣論」(93年)でサントリー学芸賞)が、その現状と将来についてインタビューで語っている。経済学部や法学部を目指してる人は当然として、ネット社会の在り方を考える上でも参考になる論である。全文を引用するので、最新の評論文を読解する基礎として、また来年の小論文の備えとして、しっかり読んでおいてほしい。

(朝日新聞DIGITAL 2月17日より)

\*

インターネット上の仮想通貨「ビットコイン」の価値の変動が激しくなっています。昨年末には、1ビットコイン=220万円まで急騰しましたが、17日朝は約2カ月ぶりに100万円を割り込みました。お金として使える店も増えてきたものの、不安定なビットコインは「貨幣」なのでしょう。国家が管理を独占してきた貨幣の存在が、技術進歩で揺らいでいる現代。デジタル通貨や中央銀行、国家の関係を、貨幣論で知られる経済学者の岩井克人さんに聞きました。

——ビットコインは、1年前の1コイン=10万円程度から年末に200万円超に急騰後、下落するなど乱高下しています。新しい「貨幣」と言えるのでしょ

うか。

「2009年の登場以来、ひょっとしたら貨幣になるかもしれないと考えてきました。しかし、この1年で考えが変わりました。もはや、貨幣になる可能性は極めて小さくなってしまった。最初は麻薬の地下取引などで利用が広がったため、そのまま静かに一般取引でも利用が広がれば貨幣になる、というシナリオも描いていました。しかし、逆説的ですが、人々が『貨幣になるかもしれない』と期待と興奮の中で値上がりを目的に買い始めたことが、逆に貨幣になる可能性を殺しています。13年のキプロス危機の際などにはビットコインへの資金逃避もみられましたが、これだけ値動きが激しいと逃避先にもなりにくくなる」

——貨幣になるには、何が不足しているのでしょうか。

「いえ、逆に過剰な価値を持ってしまったのです。あるモノが貨幣として使われるのは、それ自体にモノとしての価値があるからではありません。だれもが『他人も貨幣として受け取ってくれる』と予想するからだれもが受け取る、という予想の自己循環論法によるものです。実際、もしモノとしての価値が貨幣としての価値を上回れば、それをモノとして使うために手放そうとしませんから、貨幣としては流通しなくなります」

「ところがビットコインは、数が限られて将来価値が上がるという期待感から、それ自体が『値上がりしそうな資産』という一種の価値あるモノになってしまった。事実、この1年で大変な投機の対象になりました。値上がり益を期待して手にする限り、だれもそれを他の商品との交換手段などにしない。もうからないからです」 (続く)